

「自ら学ぼうとする心」を育むことは、 「確かなる力」へと結びつく

～ 出題予告方式の進級漢字チャレンジの実践より～

研究の趣旨

子ども達が、自ら進んで、目的を持って家庭学習に取り組むようにするにはいかにしたらよいかを考える中、一つの試みとして出題予告方式の進級漢字テストを行ってみることにした。それは、出題される漢字の半分を予告しておいて行う進級式の漢字チャレンジである。これを毎日実施するようになると、子ども達は、日々、合格させ進級していけるよう努力しだした。そして、合格することに喜びを覚え、意欲的に宿題（漢字練習）に向かうようになってきた。「やってきなさい」という宿題から、「自ら取り組みよう」とする宿題への変化だ。教師はそうした姿を支え、励ますことに力を注いだ。

そして、今回、「漢チャレ合格率（日々実施する漢チャレを合格させていく割合）」と「漢字を書く力」との関係性を統計解析してみると、漢字チャレンジを合格させるよう日々努力することは、間違いなく「確かなる力」へと結びついていることが明確となった。

また、「字を丁寧に書く」とことと「漢字を書く力」との相関関係も探してみると、その両者の間にも相関関係があることが、はっきりとした。

こうして、「自ら学ぼうとする心」を育むようにしていくことは、「確かなる力」へと結びついていくと確信を得るに至った実践である。

<はじめに>

「やったじゃん！！ 正解！」そんな言葉をかけ、A児のノートに花丸をつけ、1000000・・・点をつけたことがあった。なかなか解けない問題に苦戦しながらも、あきらめず一生懸命考えた末に、正解にたどりついたA児の姿に対し、自然とかけた言葉であり、つけた丸、点数であった。25年も昔の初任の頃のことであり、今となっては、いくつ0（ゼロ）をつけたか定かでない。しかし、A児がその言葉、点数に感激をしたのか、「先生が自分のことのように喜んでくれることが嬉しくて・・・」と日記に綴ってきたことは、今でも鮮明に覚えている。A児は、その後も熱心に学んだ。努力を惜しまなかった。とにかく、自分から意欲的に学ぼうとする子であった。私は、そんなA児の姿を見つめながら、「こんなA児のような子をこれからも育ていきたい」、そう心に期したことを覚えている。これが、初めて教壇に立ち、子ども達と真剣に向き合う中で感じた私の最初の思いであった。そして、このことは、私の教師生活の原点となった。

この四半世紀の間に、教育界にもいろいろな流れがあった。そして、今日の教育課題はというと、学力問題があげられる。経済協力開発機構(OECD)が、世界各国の生徒を対象に行った学習到達度調査(PISA)で、日本人の学力が世界との比較において低下の傾向にあると発表されるや、教育関係者は何とかせねばと躍起になっている。

「読解の力をつけなければいけない」「思考する力を育まねばならない」「表現力を身につけさせなければいけない」等々、課題が山積する中、学習指導要領も改訂され、我々教師集団がどのような方向へ進むべきか文部科学省は指針を出した。

学習指導要領改訂のポイントとして示されたのは、「改正教育基本法等を踏まえた学習指導要領改訂」「『生きる力』という理念の共有」「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」「確かな学力を確立するために必要な時間の確保」「学習意欲の向上や学習習慣の確立」「豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実」の7つである。教育課題が山積する中、示された改訂のポイントであるが、私はこの中にも明記された「学習意欲の向上や学習習慣の確立」に目が留まり、「教育の根っことなるものは、いつの時代になろうとも普遍だなあ」との思いを強くした。

つまり、私が、初任の頃に抱いた思い、「子ども達を教育していく上で大事にしなければならぬことは、『自ら～しようとする心』を育むこと。自ら学ぼうとする心なくして、確かなものは身につかない。」は、時代が変わろうとも普遍的なものだと感じたのである。自ら学ぼうと努力するからこそ、「基礎的・基本的な知識・技能」が習得されていくのであろう。また、自ら考え、自らの思い・考えを表出しようとするからこそ、「思考力・判断力・表現力」も育成されていくのであろうと考えている。

こうした中、子ども達に『自ら学ぼうとする心』を育むようにしていくことは、間違いなく『確かな力』へと結びついていくと確信を持つに至った取り組みを、自身の教育実践の中から紹介したいと思う。それは、漢字学習への取り組みである。本当に些細な、ちっぽけな取り組みである。しかし、そこには教育の真髄が秘められていると確信している。『たかが漢字学習、されど漢字学習』である。拙い研究ではありますが、少しでもみなさんの参考になればと思い、紹介いたします。

・「自ら学ぼうとする心」を育む漢字学習のはじまり

今、私は自身のホームページ (<http://tarasawa.cool.ne.jp>) にて、先生方の少しでもお力になればと思い、教育現場の実務に役立つソフトを公開している。その中の一つに、「漢チャレMaker」というプログラムがある。それは、子どもたちが意欲的に取り組む漢字チャレンジプリントの作成を手伝ってくれる EXCEL マクロのプログラムである。

このプログラムの開発のきっかけは、15年ほど前に勤務していたK小学校において実践してみた取り組みにある。かねてから、子ども達が意欲的に学ぼうとする場面作りを念頭に教材研究を心がけていた私は、子ども達が家庭学習をするにあたって、自ら進んで学習しようとするような状況をいかにしたら作れるかということを考えていた。子ども達が自分から勉強しようと思って家庭学習(宿題)に向かっていくようにするには、まず、宿題は個に即していなければならないだろうなと考えていた。

そうした中、一つの試みを始めてみることにした。それは、出題予告方式の漢字小テストである。漢字小テストを行い、定めた合格ラインに達したら次の小テストへと進むことができるという方式にして、これを毎日行ってみた。子どもは、誰も「できるようになりたい」との願いを持っているであろう。そんな子ども達であれば、次の級で出題される漢字を予告しておけば、合格したいがゆえ、その漢字を自分から進んで練習するであろう。そんな予測のもと、この試みを始めてみることにした。

合格ラインは80点とした。1問10点で10問出題する。その10問の内、5問は出題予告しておいた漢字とし、残りの5問はそれまでの級で出題した問題から教師側で抽出して出題することにした。

反応は、上々であった。次から次へと合格させることができることを喜び、進んで漢字練習をする子が増えてきた。しかし、中には相変わらず主体的に漢字練習するわけではなく、不合格となり、次の日も同じ漢字小テストに挑戦なんて子もいた。

私は、この漢字練習は、やり方を自分でよく考えてさえ行えば、次々合格させることはそれほど難しいことではないだろうと考えていた。まず、次の級で出題される5問についてきちんと書けるように練習し、さらに加えて、それまでに合格させた級において間違えた問題も練習し定着させていくというやり方をすればよいだろうと考えていたのである。

しかし、そうした学び方も子ども自身が見いだしていくことに価値があるであろうと考えていたので、あえてアドバイスすることもしなかった。

子ども達は、思い思いの方法で漢字練習に取り組むようになった。ここに一律ではない家庭学習が始まった。中には、毎日100点をとらないと気がすまない。そのために、予告した漢字を練習するのは当たり前。さらに、それまでに合格させてきた級の漢字もすべておさらいしないと気がすまないという子も出てきた。大変な努力家の子だった。平気で2時間、3時間、家庭学習する子だった。しかし、中には、「今日も落ちちゃった。」となかなか次の級へ進めない子もいた。

努力の仕方や程度には個人差があった。スタートラインはみな同じであったが、日がたつにつれ、進級具合に差が出てきた。そうした中、自然と子ども達は自分にとって合否が気になる友達がでてきた。要は、ライバルを見いだしていったのである。進級を競い合い学ぶ姿も生まれてきた。不合格をあまり気に留めなかった子の心の内にも、「あの友達に追いつきたい」、「遅れをとりたいくない」、「負けたくない」といったものがエネルギーとなり、自分から漢字練習に向かう姿が生まれてきたのである。

こうして、「やってきなさい」という宿題でなく、「自ら取り組もう」とする宿題（漢字練習）が始まった。

・「漢チャレプログラム（漢チャレMaker）」開発のきっかけ

こうして始めた漢字小テスト、次の学校でも継続した。そして、名称も『漢字チャレンジ』と改めた。子ども達自らが、進級をめざし意欲的に学習する、チャレンジする、そんな意味合いからのネーミングであった。意欲的に学ぶ子ども達の姿を目の当たりにしていると、次から次へと新たな級の漢字チャレンジプリントを作成していくのが楽しかった。

しかし、そこには、労力と時間を費やした。K小学校でこのことを始めた時は、日本語ワードプロセッサOASYSを使い作成しており、蓄積されていく問題（データ）から次の級で出題する問題を抽出し、それを使って新たなプリントを作っていくのはけっして楽な作業ではなかった。ではあるが、子ども達が自分から進んで漢字練習に取り組む姿は、そんな労苦を気にも留めさせないエネルギーとなった。

ちょうどその頃からパソコンを習い始め、次のU小学校で、表計算ソフトの有能な機能（並べ替え機能；ソート機能）を利用しながら漢字チャレンジプリントを作成できるようになってきた頃には、作成に要する時間もだいぶ短くなってきた。

さらに、次のT小学校へ転任しても、この漢チャレ（この頃には、「漢字チャレンジ」を略して、「漢チャレ」と子ども達が呼ぶようになっていた）は続けた。そして、転機が訪れた。T小学校が学力向上フロンティアスクールとして文科省から指定を受けたのである。学力向上フロンティアスクールとしての研究の使命は3つあった。それは、「個に応じた指導のため

の教材開発」と「個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善」、それに「児童生徒の学力の評価を生かした指導の改善」の3つである。私は、この「個に応じた指導のための教材開発」という課題に対し、自身が取り組んできた「漢字チャレンジ」は一つ有効な取り組みではないかと学校職員に提案した。そして自分だけがパソコンの機能を使いこなした漢字チャレンジプリントを作成しているのではなく、誰でも手軽に漢字チャレンジプリントを作成できるように考えていく必要にせまられた。

こうして、「漢字チャレンジプリント作成プログラム」を開発することとなった。

・「漢チャレプログラム（漢チャレMaker）」開発のコンセプト

「漢チャレMaker」は、Excelのマクロ機能を利用したプログラムである。要は、それまで全て手作業で行っていた漢字チャレンジプリント作成の作業を半自動化しようというものだ。プログラム開発のコンセプトを、以下の通りとした。

- ・ 誰でも手軽に扱えるよう、多くの先生方が扱いに慣れている Excel を利用してプログラムを作る。
- ・ Excel の扱いに不慣れな初心者でも、操作ミスができるだけ起きないように配慮する。
- ・ 漢チャレプリントは、出題予告方式の進級チャレンジプリントとする。
- ・ 漢チャレプリントは、前の級で出題予告しておいた5問と教師が過去問題から再度出題することに決めた5問との合計10問からなるプリントとする。
- ・ 作成にあたっては、プリントの作成者が、次の級で新たに出題する問題5問を作成することと、それまでに出了題した問題の中から再度出題したい問題5つにチェックをつける（抽出する）といった簡単な操作だけで済むようにする。
- ・ 過去問題から再度出題したい問題の抽出は、自動化しない。教師が子ども達の漢チャレプリントを毎日採点し、再出題の必要性を感じる問題にチェックをつけるプログラムとする。児童の実態を把握しながら漢チャレプリントを作成することが大切。
- ・ 過去問題のデータは出題の頻度により自動的に並べ替えが行われ、何回出題したかが把握できるようなプログラムとしておく。そして、再出題問題の抽出にあたっては、それまでに出了題した頻度も参考にできるようにしておく。
- ・ 出題予告しておいた問題を予告順に出題するか、それともランダムに並べ替えて出題するかを自由に選択できるプログラムにしておく。また、出題予告した漢字を～ 問目に出題するか、～ 問目に出題するかも自由に選べるようにしておく。
- ・ 出題予告した漢字が、「教科書」とか「ドリル帳」の何ページから出題されたのかわかるような漢チャレプリントを作成できるようにしておき、学習者が自分で出題予告漢字はどういう漢字なのかを調べることができるようにしておく。
- ・ 以上のようにして進級式の漢チャレプリントを作成するわけだが、スタート級は何級からでも始められるよう初期設定画面を用意しておく。そして、1級まで到達後は、1段、2段、・・・というように進めていけるようなプログラムにしておく。
- ・ 漢チャレプリントの作成が、10分以内でできるようなプログラムとする。

・「漢チャレ学習」実施の原則および約束事

漢チャレの取り組みを始めて15年になるが、始めた当初の実施原則を大事にしつつ、学習者である子ども達と次のような約束事も作り、今では実施するようにしている。

1. 指導者側の構え（始めた当初から実施の原則としたこと）

- ・ 国語の授業のある日は、毎日実施する。授業開始5分を使って実施。（毎授業5分使ってしまうと他の学習内容の習得が不十分となることを懸念する方もあるかもしれないが、これまで実施してきたクラスのCRTや各方面の学力検査結果をふまえると決してそんなことはないと感じている）
- ・ 実施した漢チャレは、その日のうちに教師が採点。そして、返却。（採点には、10分ほどの時間を要するが、業間休みや昼休みなどを利用して行う）
- ・ 採点にあたっては、書かれた漢字の細部までよく見て行う。（はね、はらい、とめ、線の長短等々、よく見て採点する）

- ・ 誤字を書いたような場合、どこがよくなかったのか分かるように正しい字を書き、何に気をつけて漢字練習したらよいか明確にしてやる。と同時に、時に、励ましの言葉や頑張りを賞賛する言葉を朱書きで添える。(どんな字を、どのように練習するかは学習者に決め出させることが大切。とはいえ、すべてを子どもに任せてしまったのでは、何をすべきなのか考えようともせず、あまり考えない中、たんとと漢字練習をするということも起きてくる。子ども達に学習の指針を示していくことは大事)
- ・ 80点合格とする。(完璧を求めないことも大切。間違えた字、書けなかった字を練習するか否かも、子ども達の意志決定に任せていくようにする。間違えてしまったり、書けなかったりした悔しさを子ども達が感じ、自分から進んでそうした字を練習しようとする心を育むことが大切。このように自分自身で考え、行動をおこす余地を残しておくために100点合格とせず、80点合格にしておく。これにより、「やらされる」宿題ではなく、「自分からやろうとする」宿題となっていく)
- ・ 次の級の漢チャレ作成は、基本的にその日の漢チャレ採点が終わった以降に行う。作り置きはしないことを原則とする。(毎日採点を行い、子ども達はどのような漢字を書けなかったり、書き間違えたりすることが多いのかを把握しながら、日々、次の級の漢チャレに出題する過去問題からの抽出問題を決め出すようにする)

2. 学習者との約束事

- ・ 漢字練習してくる字は、学習者が決めてよい。ただし、次の日に合格できるような練習をしてくるよう心がけること。(80点合格せず落ちてしまった時など、次の日も、同一級にチャレンジしなければならないわけだが、～まで練習するもよし、間違えた漢字のみ練習するもよし。また、漢字練習する字により書く量に差が出てもよい。さらに何ページ練習するかも学習者が決めてよい。「このように練習してきなさい」との指示は出さないの、自分で考えて漢字練習すること)
- ・ 漢字練習は、最低でも、漢字練習ノート1ページはすること。(これは、子ども達の自主性を重んじる漢チャレの趣旨に反するが、最低これぐらいの制約は約束事として決める。自分なりに考えた努力が、確かなる力になることを実感させていかないことには、「自ら学ぼうとする心」は育まれていかない。よって、最低限の努力基準は設ける)
- ・ 漢字練習のやり方は、学習者が決めてよい。(出題予告された問題文を書く中で、漢字の使い方を覚えるもよし。出題される部分だけの漢字を繰り返して書くもよし。単漢字のみを繰り返し書くもよし。とにかく、どのような練習をすれば合格に結びつきそうか考えて練習すること)

・「自ら学ぼうとする心」が「確かなる力」へと結びつく

こうした漢チャレ学習によせた願いを読んでいただくと、確かに「自ら学ぼうとする心」は育まれるかもしれないと思っていただけたのではないかと思う。実際、下記にあげるような姿が、見られるようになる。

- ・ ふだんの漢字練習を漢字学習ノート1ページ半ほどやっている子が、土日休みの時には、3ページ、4ページやってくる姿
- ・ 出題予告した字を漢字練習するだけでなく、ノートに「まちがえた字」というコーナーを作り、そうした字もしっかり漢字練習する姿
- ・ 練習する漢字により、問題文を1回だけ書くにとどめる時もあれば、5回も6回も練習する時もある。(考えて、漢字練習をしている)
- ・ 出題予告された漢字がどのような字なのか分からない時、自分で辞書を使って調べ、同音異義語があっても、その言葉の使われ方から、どの漢字を使うのが適切に選べるようになる姿(親に聞いても、親は「自分で辞書で調べなさい」と自学を進める)
- ・ 漢字にふりがなもつけながら漢字練習する姿(何と読むのか、読み方を気かけながら漢字練習している)
- ・ 漢チャレの採点が終わると、合格したかどうか、自分の出来をすぐに確かめようとする姿(頑張った結果が気になるようである。また、不安を抱きながら書いた字の結果を確かめたいようである)

- ・ 漢チャレテストが終わった後、すぐに辞書を開き、自分の書いた字は正しかったのか確かめようとする姿
- ・ 授業開始のチャイム前に、その日に挑戦する漢チャレプリントを机上にさっと用意し、チャイムがなり授業開始の挨拶をすると同時に、漢チャレプリントに取り組む姿 等々。

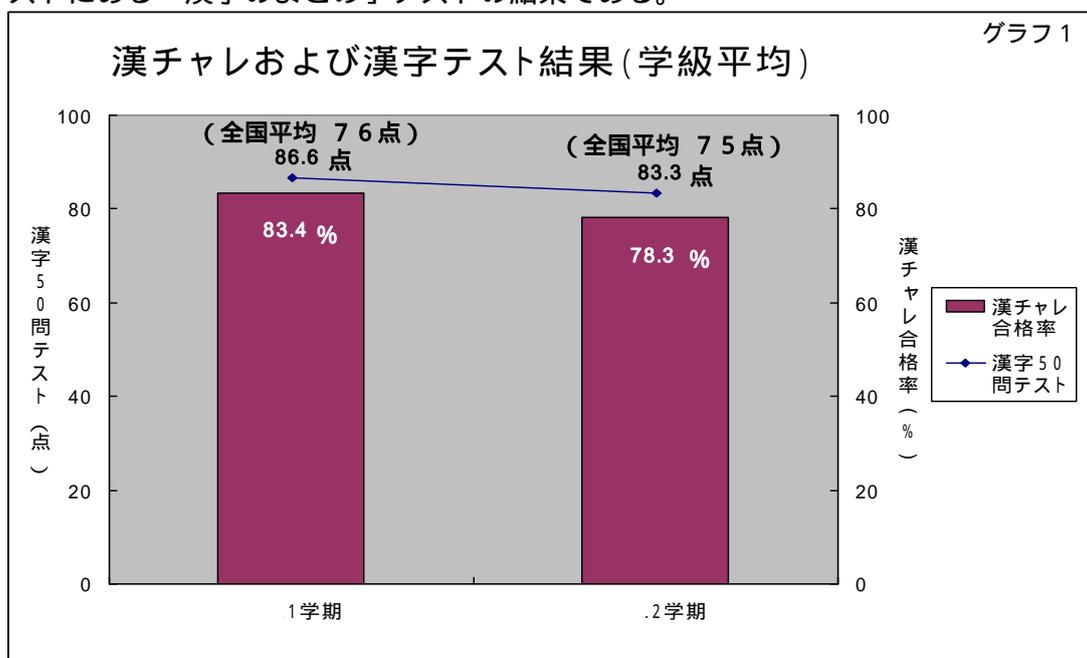
しかし、予告しておいたような漢字が出題される漢字テスト（漢チャレプリント）を行ったり、合格しなかった時には、同じ漢字テストを繰り返し行うような漢字学習をしていたのでは、「確かなる力」へは結びつかないのではないかと疑問を持つ方もおられると思う。そこで、「自ら学ぼうとする心」を育むように取り組んできていることが、「確かなる力」へと結びついていくということを実感していただけたらと思うデータを示したい。

それは、学期末などに行う漢字実力テスト（業者テストの漢字50問テスト...「習った漢字を書くことができるようになったか」を診断するテスト）の結果である。

（データは、ある小学校4学年の児童の結果である）

1. 「漢チャレ合格率」と「漢字50問テストの結果」

漢チャレ合格率とは、学期を通してどのくらいの割合で漢チャレを合格（80点以上をとる）させることができたかの割合のことをさす。なお、漢字50問テストは、K業者の国語テストにある「漢字のまとめ」テストの結果である。



グラフ1を見てもらうと漢字50問テストの結果が全国平均と比べ8～10点ほど上回っていることが分かる。漢チャレを始める以前は、学期末に50問テストをしてみると、「漢字練習を毎日しているのに、どうしてこんなに書けないんだ。」と嘆くことが多かったのが、漢チャレをやるようになってからは、その様子が一変した。漢チャレを合格させるよう日々努力していると、それは、「確かなる力」「実力」へとつながっていくと言ってよさそうである。どんな字が出題されるのか予告されていて(分かっている)、それを正しく書き、合格させようと努力しているだけなのである。

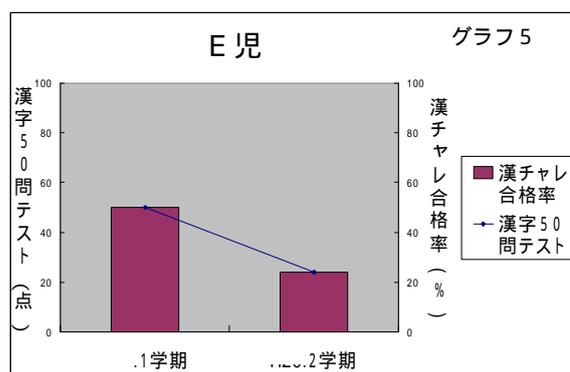
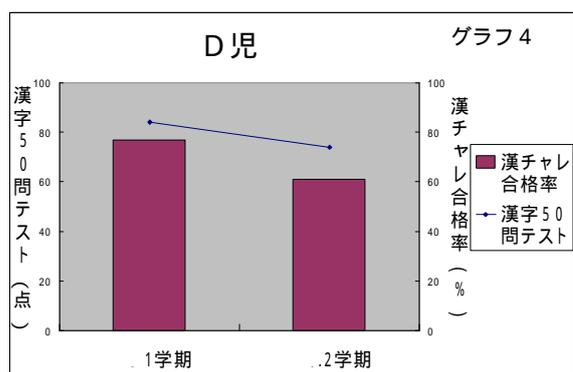
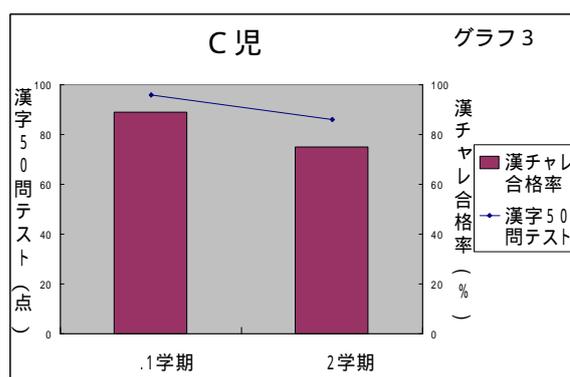
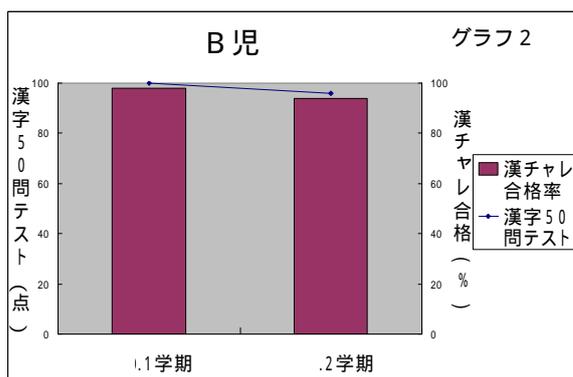
さらに、得点分布に目を向けると、下表のようなことも明らかになった。

漢字50問テスト結果	1学期	2学期
全国平均点以上の得点だった人の割合	77.8%	77.8%
90点以上の得点だった人の割合	63.0%	70.4%

学級の4分の3以上の子ども達が全国平均を上回る得点をとっていて、さらに、90点以上の得点をとった子どもも、2学期にあっては、7割以上も占めていることが分かる。漢チャレを始める以前の私にとっては、驚きの数字だ。

また、グラフ1からもその傾向は感じとれるのだが、漢チャレ合格率と漢字50問テスト

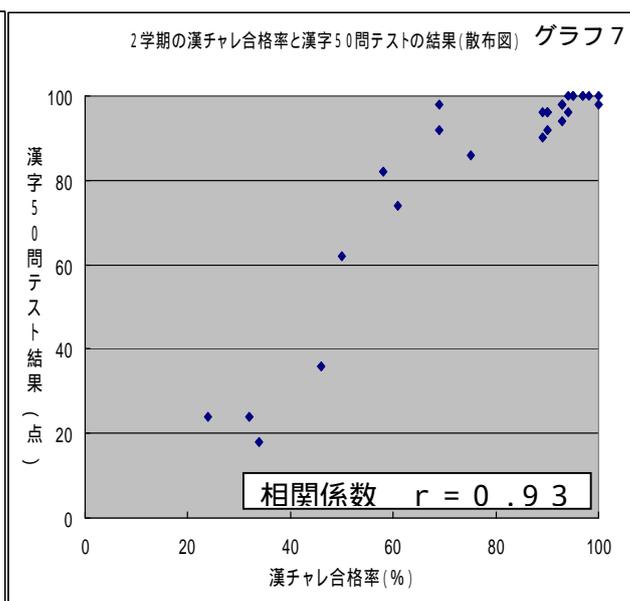
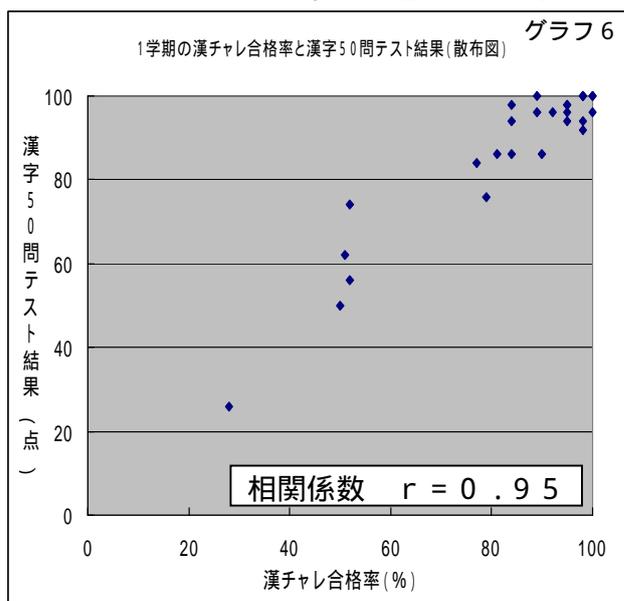
結果との間には、相関関係がありそうだとすることを、過去の実践の中から感じていた。実際、グラフ2～5のような関係を示す個人データをピックアップすることができた。



全てのデータがこのようになっていたわけではないが、こうしたデータを見ていると「漢チャレ合格率」と「漢字50問テスト結果」との間には、密接な関係がありそうなことがうかがえる。そこで、このことについて、もう少し探ってみることにした。

2. 「漢チャレ合格率」と「漢字50問テストの結果」との間の相関関係

「漢チャレ合格率」と「漢字50問テスト結果」との間の相関関係について探るため、Excelで両者の関係を散布図で描き、CORREL関数を使って相関係数を調べてみることにした。結果は、下のグラフ6, 7の通りである。



グラフ6, グラフ7の散布図を見ると、明らかに強い正の相関を見て取ることができる。実際、ExcelのCORREL関数を使って相関係数を求めてみると、1学期は0.95で、2学期は0.93であった。これは、両者の間に強い相関関係があることを示す値(1)であ

る。

- 1 相関係数とは、基礎統計量であり、2つの変量の間の関係を数値で表すものである。相関係数は、通常 r という記号で表され、-1から1までの値をとる。相関係数から相関の強弱を判断する目安は、右の通り。

0.8	$ r $	強い相関関係あり
0.6	$ r < 0.8$	相関あり
0.4	$ r < 0.6$	弱い相関あり
	$ r < 0.4$	ほとんど相関なし

3. 「漢チャレ合格率」と「漢字50問テストの結果」との間の具体的関係（回帰分析）

「漢チャレ合格率」と「漢字50問テスト結果」との間には、明らかな相関関係があることが分かった。そこで、さらに分析を進めるため、回帰分析(2)を行うことにした。

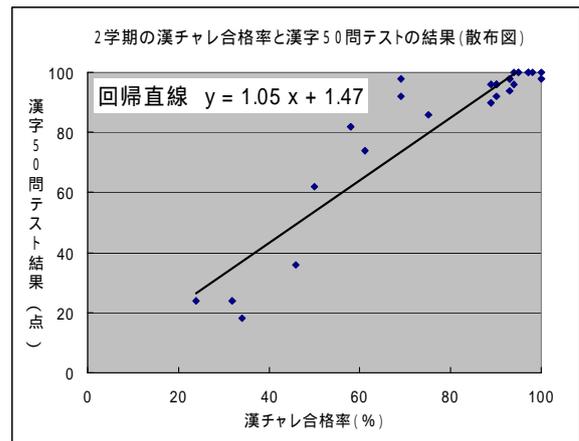
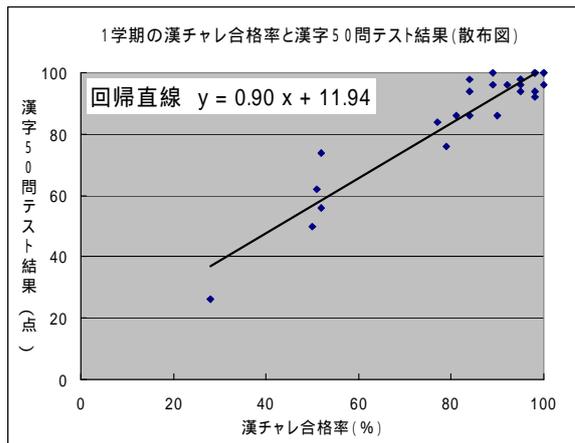
- 2 2つの変数 x と y があるときに、 x と y の関係を示す式を求めるには、回帰分析と呼ばれる方法を用いる。回帰分析には、単回帰分析、重回帰分析、多項式回帰などがある。単回帰分析では、2つの変数 x と y のデータに、 $y = a + bx$ なる1次式(直線)を当てはめることを考える。この1次式は、 x から y を予測しようということになるが、予測される y のことを目的変数、予測するのに使う x のことを説明変数と呼んでいる。また、回帰分析では、 a のことを回帰係数と呼び、 b のことを切片、あるいは定数項と呼んでいる。

Excel では、回帰係数となる a を SLOPE 関数で調べることができ、回帰直線の切片となる b を INTERCEPT 関数で調べることができる。

そうして求めた関係式が以下の通りである。

「漢チャレ合格率」と「漢字50問テスト結果」との間の関係式(単回帰分析)	
(...漢チャレ合格率, ...漢字50問テスト結果)	
1学期の回帰直線	$y = 0.90x + 11.94$
	(この式は、漢チャレ合格率が50%の人は、漢字50問テストにおいて、57点とれるだろうと予測されることを意味する。逆に、漢字50問テストで60点を取るには、ふだんの漢チャレにおいて53.4%以上の合格率が必要であろうと考えられる)
2学期の回帰直線	$y = 1.05x + 1.47$
	(この式は、漢チャレ合格率が50%の人は、漢字50問テストにおいて、54点とれるだろうと予測されることを意味する。逆に、漢字50問テストで60点を取るには、ふだんの漢チャレにおいて55.8%以上の合格率が必要であろうと考えられる)

こうして求めた回帰直線をグラフ6およびグラフ7に書き加えると下のようになる。



4. 相関係数や回帰分析から明らかになったこと

- (1) 「漢チャレ合格率」と「漢字50問テスト結果」との間には、強い正の相関関係がある。つまり、ふだん行っている漢チャレにおいて高い合格率を示している児童は、漢字50問テストにおいて高得点が期待できる。
- (2) 日々、漢チャレにおいて合格するよう努力を怠らなければ、それは、「確かなる力(漢字を書く力)」となる。
- (3) 回帰係数がほぼ1であることから、「漢チャレ合格率」の伸びの値は、そのまま「漢

「漢字50問テスト結果」における期待得点の伸びへとつながりそうである。

- (4) 既習漢字の6割を書くことができるという、「漢字を書く力」がおおむね良好とされる状態にするには、漢チャレ合格率を53～56%以上にすればよいようだ。
- (5) 漢チャレ合格率が50%でも、漢字50問テストにおいて54～57点は取ることができるであろうと予測される。

5. 分析から明らかになったことの意義

分析から上記のようなことが明らかになったことの意義は大きい。それを以下に示す。

- (1) 出題漢字が予告されている漢字小テスト(漢チャレプリント)を行っていても、それを合格させるように子ども達が努力していれば、それは「確かなる力」へと結びついていくと、指導に自信を持つことができた。そして、これからも子ども達が努力する姿、「自ら学ぼうとする心」を支えるよう支援していこうとの思いを強くすることができた。
- (2) 漢チャレを2回に1回は合格させるというペースで行っていても、漢チャレ合格率は50%となる。1度チャレンジに失敗して、次の日も同じ級にチャレンジするという、つまり出題漢字がすべて分かっているような漢チャレであっても確実に合格させるようにしていれば、合格率は50%になる。「漢字を書く力」がおおむね良好とされる6割まで到達するには、合格率を50%より少し上回ることができるになればよいわけで、子ども達の頑張りを支えたい、励ましたいとの思いが自然と強くなる。
- (3) 児童に、そして保護者に、日々努力することの大切さをデータをもって語ることができる。実際、本年度、個別懇談会において、このようなデータを示し、これからも子ども達の頑張りを支え、励ましてやってほしいと語ることができた。

こうした漢チャレ学習の意義を実感すればするほど、漢チャレ作成、採点の多少の労苦など、気にならなくなっていった。自然と、漢チャレ採点に熱が入っていく。採点を行う際、誤字にペケをつけながら、「ここが気をつけるポイントなんだよ」と、「はね」「はらい」「とめ」等々を明示する指導に力が入っていった。そして、「字をきれいに書くことは、一画一画をおろそかにしないことだから、字を覚えることにもつながるんだよ。」と語るようになっていった。

実際、「字の丁寧さ」と「漢字50問テスト」との間には、相関関係があるのだろうか。あるに違いないとは思いつつ、統計分析したことがなかったので、これについても関係を探ってみることにした。

6. 「字の丁寧さ」と「漢字50問テスト結果」との間の相関関係

「字の丁寧さ」は、物事へ取り組む姿勢、そのものが表れる。「一画一画きちんと書こうとする」ことは、正に、「自らしっかり学ぼうとする心」そのものである。それが、「確かなる力(漢字を書く力)」とどのような関係にあるのだろうか。

字の丁寧さの判断は教師の主観となり、そこに客観性、厳密さを求めることはできないが、下記の判断基準を設け、子ども達の漢字練習ノートを名前をふせた状態で開き、5段階評定してからデータとの照合をし、「漢字50問テスト結果」との相関関係を探ってみた。

<字の丁寧さの判断基準>

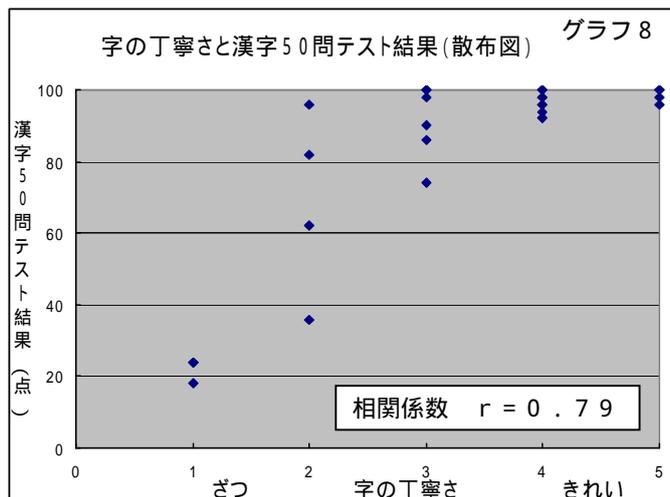
- 5レベル...「はね」「はらい」「とめ」等がしっかりしているのはもちろんのこと、筆圧が感じられ、字形がたいへん整っている。
- 4レベル...5レベルに準じるが、字形が5レベルほどは整っていない。
- 3レベル...「はね」「はらい」は意識して書いているが、筆圧が弱かったり、字形があまり整っていなかったりする。
- 2レベル...「はね」「はらい」をきちんと書いていない字がある。筆圧を感じず、字形が整っていない。誤字を時折目にする。
- 1レベル...字形整わず、「はね」「はらい」等を意識して書いていない。誤字も目立つ。

結果は、右のグラフ8の通りである。

この散布図や相関係数から、「字の丁寧さ」と「漢字50問テスト結果」との間にも、正の相関関係があることが分かる。そして、注目に値するのは字の丁寧さレベル3以上の児童は、漢字50問テストで全員が70点以上をとっているという点である。

このことは何を意味するかというと、多少字形が整っていないくとも、「はね」「はらい」を意識して漢字練習をしていけば、それは、「漢字を書く力」へと結びついていくということである。

今回、このことも明確にデータにより裏打ちされたことは、大きな意味があった。私は、このことも個別懇談会にて親に伝え、子ども達が学習に向かう心構えの大切さを説いた。



・今後の課題

1. 学期が進むとそれだけ学習する漢字は増えるわけで、漢チャレで出題される蓄積データも増えることになる。そうした中、合格率が落ちてくるのはやむを得ないと思う。しかし、グラフ5のE児のように大きく落ち込んでしまうようなことになると、それは「確かなる力」へと結びつかない。このように漢チャレ合格率が落ち込んでしまわないようサポートするには、どうしたらよいのか明らかにしていけないといけない。
2. グラフ7を見ていただくと分かることだが、漢チャレ合格率が50%に満たない児童が、少なからずいる。努力の仕方がよくないのかもしれないが、これらの児童も努力していないわけではない。こうした児童が、やる気を出し意欲的に漢字練習に取り組むようにするには、どのように支援すべきなのか明らかにする必要がある。
3. グラフ8を見ると、漢字練習する字が雑であればあるほど、それは「確かなる力」へと結びつかないことが分かる。「はね」や「はらい」等、意識して自ら漢字練習に取り組もうという気にさせるには、いかにしていったらよいのか指導方法を探っていきたい。
4. 子ども達が自ら学習に取り組もうとする「学習意欲の向上」は、とても大切である。と同時に、「学習習慣の確立」も、今日、求められている教育課題である。家庭といかに連携しながら、こうした課題へ向かっていくかが大事である。これまで、通知票にて漢チャレ合格率を伝えたり、個別懇談会にて、日々の努力の大切さや字を丁寧に書くことの大切さなどを訴えたりしてきたが、情報を流すだけでなく、家庭といかに手を携えながら子ども達の「自ら学ぼうとする心」を育てていくかが課題である。

<終わりに>

いつも慌ただしさにかまけ、自らの学習指導をじっくりと振り返ってみたり、分析してみたりということが少なかったように思うが、今回、この15年にわたる「漢チャレ学習」の取り組みをしっかりと振り返るきっかけを与えてくださった現勤務校の校長先生に感謝したいと思う。今後も、子ども達に「確かなる力」を身につけさせるため、日々の授業改善につとめ、よりよい学習指導のあり方を追求していきたいと思う。

【参考資料】

- ・ 「新学習指導要領」ならび「学習指導要領改訂の基本的な考え方」(文部科学省)
- ・ 「Excelでやさしく学ぶ統計解析」(東京図書)
- ・ 「すぐわかるExcelによる統計解析」(東京図書)